木村研究室の思い出

北海道大学名誉教授 三浦 敏明 （12 期 1969 年卒）

北大を定年退職してから間もなく 14 年が過ぎます。この数年は恩師、先輩、同期の訃報に接することが多く、そろそろ終活をと考え、昨年から少しずつ取組んでいます。その一つが写真・アルバムの整理で、1968 年 4 月から 1985 年 3 月までの 17 年間在籍した木村研究室での思い出の写真が沢山ありました。40、50 年以上経った今でも、その一枚一枚が当時のことを鮮明に思い出させてくれます。

木村道也先生（写真 1）は 1943 年に東京大学医学部薬学科を卒業後、同大の特別研究生や千葉大学薬学部講師を経て、1954 年に北海道大学に新設された医学部薬学科に赴任されました。薬学科創設の頃のことは「北海道大学薬学部創立 50 周年記念誌」で多くの方々が紹介されていますが、最初に設置された講座は衛生化学（赤木先生）、薬化学（水野先生）、薬品分析化学（木村先生）、生薬学（三橋先生）で、少し遅れて薬品製造学（伴先生）が設置されたとのことです。34 歳で教授に就任された木村先生とともに、薬品分析化学研究室の立ち上げに参加したスタッフは南原利夫（助教授）、河田明治、藤間貞彦（助手）、高野良宏（教務職員）の各先生です。「新設された薬学科とはいっても、各研究室は医学部の旧校舎の一角にあり、ガスも水道も満足にでないなど、研究環境は酷いものだったが、日本各地から集まった 20、30 歳代の若い先生ばかりで熱気に満ちていた」と、当時の状況を藤間先生からは何度も、

写真 1 北大に赴任当時と 37 年後の木村先生

写真 2 恒例の教室行事 -山登り（1968 年）-

上田亨先生や米光宰先生、1 期生の先輩からも同じ話を伺いました。これが、「劣悪な環境でも忍耐強く、自ら切り拓く」北大薬学の学風の原点だったのでしょう。

それから約 10 年後の 1965 年に医学部薬学科は薬学部に昇格し、新校舎での教育・研究がはじまりましたが、その学部 1 期生が私たち 12 期生 80 名です。そして、1968 年の春に私も含めた 12 期生 6 名が木村研究室に配属されましたが、その時の研究室スタッフは助教授・河田明治、助手・藤間貞彦、秋山和幸（2 期生）、教務職員・小尾陞の各先生で、院生は 8 期の藤野さん、9 期の川添さんなど 5 名在籍していました。毎日繰り返される実験やレポート作成、毎週のセミナーなど、研究室では密度の濃い時間を過ごしましたが、同時に実験以外での研究室のイベントもおおいにエンジョイしました。歓迎コンパからはじまり、夏は海水浴付きの勉強会も兼ねた合宿旅行、秋の山登り（写真 2）、冬のスキー旅行、木村先生宅での新年会、温泉での新年会、卒業コンパなどなどですが、感心したことに、木村先生はこれら行事のほとんどに参加されましたし、研究室の OB/OG も多数参加されていました。

また、札幌や東京、あるいは薬学会や分析化学会の年会開催地で催された研究室の集まりにも沢山の OB/OG が参加されました。1 期生の平山さん、2 期生の長縄さんや西田さん、3 期生の相沢さんや岡元さん、景浦さん、4 期生の仁科さん、6

期生の遠藤さんや岡田さん、乃生さん、8 期生の中森さん、10 期生の奥山さん、桑原さん、清水さん、などなどです。すでに社会で活躍されている先輩諸氏と親しく交流できたことは私たち後輩にとっては大変有難く、進路選択などでの貴重なアドバイスも頂きましたし、木村先生とのエピソードも沢山伺い、「同門の絆」を心強く感じたものです。このような研究室のイベントは木村先生が退官されるまでほぼ定期的に開催され、その後の門下生同士の交流に繋がりました。

木村先生が北大に赴任されてから定年退職されるまでの約 30 年間、木村先生の教えを受けて巣立った講座出身者は 1 期生から 28 期生までの約 170 名です。また教員スタッフとしては、前出の先生方の他にも、吉沢逸雄（5 期生）、沢谷拓治（14 期）、高木英利（17 期）、山本晴彦（東大薬）、山本敏夫（16 期）、武藤俊樹（18 期）の各先生が一時期在籍していました。これら門下生が多数集って、1981 年秋には木村先生の還暦のお祝いが札幌（写真 3）と東京で、また 1985 年 3 月には伴先生、三橋先生と合同の退官記念講演会と祝賀会が札幌で開催されました。

木村先生が北大を退官され、故郷の松江市に戻られて県立島根女子短期大学長になられてからも、「木村先生を囲む会」が 1985 年秋と 1990 年 1 月に東京で、1990 年 8 月に札幌で開かれました。さらに、1996 年には木村先生が勲二等瑞宝章を受章されたことから、同年の 11 月には「木村先生の叙勲を祝う会」が札幌で開催され（写真 4）、多数の門下生がお祝いに駆けつけ、その後の叙勲記念小旅行（札幌～小樽～定山渓温泉）も木村先生とともに楽しみました。今思えば、還暦を祝う会も、叙勲を祝う会も、お祝いを口実にして門下生が集うことが主な目的で、先生もそれを楽しんでいたようです。多くの門下生にとって木村研究室は時々立ち寄ってみたくなる母校であり、帰って来たくなる母港だったのかも知れません。

ところで、門下生のうち、木村研究室での在籍期間が最も長いのは、1955 年の研究室のスタートから 1976 年に東日本学園大学（現・北海道医療大学）教授に転出されるまでの 21 年間在籍された藤間先生ですが、先生は千葉大学時代の木村先生の教え子でしたから、実際にはさらに長いことになります。藤間先生に次いで長いのが私で、4 年次の卒業実習生からはじまり、修士課程、博士課程、オーバードクターとしての研究生、教務職員、助手、助教授と、通算で 17 年（1968-1985）在籍しました。木村先生の還暦の祝いへの寄稿文で、藤間先生は「・・・余りにも研究室の居心地がよく、私自身は 20 年もお世話になってしまいましたが、外に職を得て感じますことは、先生が如何に自らに厳しく、苦労が多いにも拘わらず口にされること

写真 3．木村先生の還暦を祝う会（1981 年 11 月）

前列の小山、小畠、石井、水野、石本、上田の各先生の他にも、懐かしい先生方がいます。探してみて下さい。

写真 4．木村先生の叙勲を祝う会（1996 年 11 月 30 日）

なく私共を育てて下さったものと、今にして少し理解できるようになり、感謝の念で一杯です。・・・」と書かれています。私も全く同感で、学生の主体性を重んじる指導方針を通じて自由闊達な運営をされた木村研究室は本当に居心地がよく、その 17 年間に沢山のことを学び、多くの先輩、後輩と出会い親しくなれたことは幸せでした。この間、先輩から後輩へエピソードを交えながら木村先生の人柄について語りつながれました。たとえば、「常に冷静で温厚な教育者」、「淡々として多くを語らない先生」、「葉巻の似合う、もの静かな語り口の英国紳士」、「さりげない冗談を言われる先生」、「物静かで、時々ピリリとした警句を吐かれる先生」などはほとんどの門下生に共通する木村先生の印象です。また、初期の頃の先輩らは「希代の照れ屋」、「めったに褒めない。めったに叱らない。めったに笑わない先生」、「一見優しいようで厳しい、厳しさと優しさがうまく調和した教育者」とも評していますが、私たち以降の年代の教え子に対しては笑顔も冗談も増え、宴会では余興にも参加されました。写真5は学部の歓迎コンパでの教室の余興に参加した先生です。先生の十八番はアリランアリランアラリヨの歌い出しではじまる「アリラン」ですが、それ以外の歌も知っているだろうかと思った学生が画策し、ある年の温泉の宴会では先に「アリラン」を歌ってしまいました。さあどうなるか、と皆が注目する中で、先生は「では僕は正調アリランを歌うよ」と宣言され、淡々と「正調アリラン」を歌いましたが、もちろん、私たちにはどこが正調なのか分かりませんでした。

また、「みえぬところで私たちのことを心配し、あれこれと配慮されている」、「相談に行っても、その場では素っ気ないが、手を尽くしてくれる」先生でした。進学、就職、転職などの相談で、思い当たる

写真5　薬学部の歓迎コンパでの教室の余興

門下生は沢山いるはずです。9期の川添先輩は、博士課程での研究展開に理論化学の勉強が必要となった時、東大の長倉先生や電通大の中川先生を紹介して頂き、北大の物理の研究室での勉強の機会もつくってもらったことを感謝していました。私自身も、博士論文の研究でラジカルの確認実験が必要と感じていた頃、電子研の山崎先生への木村先生の働きかけで、間もなく山崎先生から直々に ESR の使い方を教わることができ、大変感激したことを憶えています。同じく院生の頃、深夜まで実験した時は教授室の隣にあった図書室兼休憩室で仮眠することが多かったのですが、そんな時には、木村先生から「今日は会議で食事がでるから、僕の弁当を食べてくれ」と言われたことが何度かありました。北大で食事付きの会議などないはずと思いつつ、奥様手作りの弁当を有り難く頂きました。ある先輩が先生のことを「多くを知り、多くを語らぬ先生」と評していましたが、本当にそう思います。

奥様の話になると、多くの門下生にとって忘れられないのが恒例の木村先生宅での新年会です。札幌近郊に在住の教員や学生、正月に帰省しない学生が元旦そうそう先生の自宅に押しかけ、奥様の手作りの料理をご馳走になり、先生ご自慢の映写機から壁に投影される研究室行事の写真を眺めながら、遅くまでお邪魔しました。私は 4 年生の時からほぼ毎年お邪魔しましたので、整理している写真やアルバムの中には先生方や先輩、後輩の当時の写真が何枚もありました。今は故人となられた藤間先生、小尾先生、吉沢先生が笑顔で映っている写真もありました。

残念ながら木村先生は 2009 年 12 月 18 日にご逝去されました。享年 87 歳でした。翌年に札幌と千葉で開かれた「木村道也先生との思い出を語る会」には約 90 名の門下生が出席し、敬愛する木村先生への感謝とともに、先生との思い出を語り合いました。

木村先生が逝去されてからも「木村研同窓会」は続きます。2015 年 11 月には札幌で 1～28 期までの約 60 名が集い、旧交を温めました。また、コロナ禍の前は、私が上京する機会に合わせて、25 期の林君らがミニ木村研同窓会を年に 1 度は開いてくれました。木村研究室は私にとっては本当に居心地がよいところでしたが、多くの先輩や後輩にとってもそうであったと確信しています。

最後に、木村研究室に在籍した 17 年間と、その後も続いている木村門下生との交流は本当に楽しく、感謝しています。ありがとうございました。

同窓会 HP：2024 年 3 月 4 日公開